



## 学制発布から 150 年の節目に

沖縄県立総合教育センター  
所長 富里 一公

令和2年の1月から我が国を襲った新型コロナウイルスに翻弄される日々が3年目を迎えております。その間、学校現場においては、教職員の働き方改革が叫ばれる中、その流れとは逆行するように感染防止対策やオンライン授業への対応など教職員の疲弊は想像以上だと思います。また、緊急事態宣言等により学校の休校措置が長期化したために学習の定着度やコミュニケーション能力、対人関係の構築など子どもたちの学習面や心理面への影響も計り知れないものがあるのではないかと危惧されるところです。

今年は明治5年（1872年）に学制が発布されて150年の節目の年でもあります。明治政府は、近代国家建設のためにそれまでは藩校や私塾、庶民の寺子屋に代表される教育機関で行われていた子どもたちの教育を国が責任をもって行う必要から日本の学校教育をスタートさせました。西欧列強に追いつき追い越すためにも質の高い教育を国民に施すことは当時の明治政府にとっても大きな命題であったはずです。

しかし、そうは言いつつ政府としては、「殖産興業・富国強兵」のスローガンのもと西洋列強に比べると圧倒的に後れを取っている産業や軍事に予算を計上しなければならず、教育への予算措置は厳しいものであったことが容易に想像できます。そのような状況の中で初代文部大臣に就任した森有礼が自分自身と当時の文部省職員の「心得」として記した「自警」の文章は、森有礼をはじめ、当時の政治家たちが、いかに国家百年の大計として教育制度の確立に真剣に取り組んでいたかがうかがえるものです。

私自身、教育庁に勤務していた頃、東京出張で文部科学省内にある旧文部省庁舎を訪れ、文部大臣室の机上にあった森有礼の直筆の「自警」（下記参照）を見た際に心が激しく震えたのを昨日のことのように思い出します。

文部省は全国の教育学問に関する行政の大権を有してその任ずるところの責したがいで至重なりしかれば  
省務をつかさどる者はすべからく専心鋭意各その責を尽くして以て学政官吏たるの任を全うせざる可から  
ずしかしてこれを為すには明かに学政官吏の何ものたるをわきまえ決して他職官吏の務方を顧みこれに比  
準を取るが如きことなく一向に省務の整理上進を謀りもしその進みたるもいやしくもこれに安せずよいよ  
謀りいよいよ進め終に以てその職に死するの精神覚悟せるを要す 明治十九年一月 有礼自記

今、確かに学校教育が直面している状況は厳しいものがあります。しかしながら学制150年の節目を迎えるにあたり、明治の先達たちが、身を粉にして我が国の教育のために命を賭したように、我々現代に生きる教職員にもこの難局を乗り越え、教育を国家百年の大計として途切れさせることなく未来に繋いで行く責務があると考えております。

4月から本総合教育センターに赴任し、所員や研修員が日々、本県教育のために懸命に努力している姿を目の当たりにし、私自身も教育者の端くれとして、森有礼の「自警」の精神を胸に刻み職務を遂行したいと心新たにしております。

### \* \* \* \* \* もくじ \* \* \* \* \*

●卷頭言 教育センター 学制発布から 150 年の節目に	- 1
●調査研究事業～調査研究統一テーマ「これから時代に必要となる資質・能力の育成」～他 教科研修班	- 2
●特別講演会「G I G Aスクール構想で変わる授業づくり」 他 教育経営研修班	- 3
●小・中学校の先生方の実践力・指導力向上をサポート！ 他 理科研修班	- 4
●特別支援学校のセンター的機能の充実に向けて～地域教育相談員研修会の取組～ 特別支援教育班	- 5
●産業教育実践講座（北中城中学校） 産業教育班	- 6
●デジタル・シティズンシップ教育とは～情報モラル教育のその先に向けて～ 他 I T 教育班	- 7
●研修を振り返って 教科研修班、特別支援教育班、理科研修班	- 8

## 調査研究事業

### ～ 調査研究統一テーマ「これから時代に必要となる資質・能力の育成」～

本総合教育センターでは、本県の学校教育の課題解決へ向けて調査研究を行い、毎年2月初旬に研究発表会を開催しております。この調査研究は、6班から選出されたメンバーでチームを編成して取り組む「プロジェクト研究」、個人や共同で課題を設定して行う「個人・共同研究」があります。

今年度の「プロジェクト研究」では、下記の研究方針のもと「沖縄県キャリア教育の基本方針」に基づき、キャリア教育の視点を通して授業改善に取り組んでおり、義務教育課、県立学校教育課とも連携をしながら研究を進めているところです。

#### 【令和4年度プロジェクト研究 研究方針】

1. 「沖縄県学力向上推進本部会議からの提言」を踏まえる。
2. 各班の特性を生かしながら、チームとなって学校教育活動の改善・充実を推進する。
3. 事業に関する共通理解を図るため、定期的に所員学習会を実施する。
4. 学校現場で利活用できる成果物の作成を行う。
5. 本研究の研究期間は1年とする。
6. 「令和4年度重点事項」では重点事項の1つとして「中学校期の学力課題の改善」が示されていることから、実践研究は中学校1校を研究指定校として研究を進める。研究指定校は、北中城村立北中城中学校とする。

また、教科研修班員の「個人・共同研究」内容は、以下のとおりとなっております。

令和5年2月3日（金）に開催する研究発表会への御参加をお待ちしております。

種 別	研 究 テ ー マ
プロジェクト研究	学びに向かう力を育成する教育の充実 — 未来につなぐキャリア教育の視点を通して —
個 人 研 究	算数科における自己調整力を高め主体的に学ぶ児童の育成 — 授業と家庭学習をつなぐ「振り返り」の充実を通して —
共 同 研 究	I C Tを活用した体系的な外国語の授業の在り方 — 科目横断的授業実践を通じた指導と評価の一体化を目指して —

## 教 育 講 演 会

調査研究事業の一環として、本県の今日的な教育課題解決へ向けて、今年度は3回の教育講演会を実施します。

第1回教育講演会は、去る5月24日(火)に沖縄大学教授 名城健二 氏をお招きして、「発達障害と愛着障害の類似点と相違点～対応の違いを学ぶ～」を演題とするオンライン講演会を無事に終えることができました。

今後の教育講演会は、下記の先生方をお招きし、御講演していただく予定です。児童・生徒理解や授業改善の方向性について、多くの示唆がいただける貴重な機会になると考えております。

下記の教育講演会(オンライン)への申し込み方法は、各学校に届くチラシ、または、本総合教育センターWebページを御参照ください。多くの参加をお待ちしております。

期 日	講 師	主 な 内 容
令和4年9月27日(火)	京都大学 准教授 石井 英真	学びに向かう力を育む学校教育の在り方 ～学校ぐるみの面の授業改善～
(予定) 令和5年2月3日(金)	京都大学 教授 西岡 加名恵	(仮)「資質・能力」を育成するパフォーマンス評価

※ 開催は、新型コロナウイルス感染症に係る県内での状況等を踏まえ検討しております。

延期もしくは中止になる場合は、本総合教育センターWebページでお知らせいたします。

## 特別講演会「G I G Aスクール構想で変わる授業づくり」

令和 4 年 6 月 7 日、本総合教育センター多目的研修棟講堂にて、令和 4 年度第 1 回特別講演会が行われました。

本講演会は、「明日を担う児童・生徒の教育に携わる教育関係者が、豊富な経験及び実践に基づいた講話を拝聴することで、今後の教育方策等に資する機会とする」ことを目的として長期研修員及び所員を対象に実施しており、今回は、琉球大学教育研究科高度教職実践専攻准教授の藏満 逸司氏を講師にお迎えしました。

演題は、「G I G Aスクール構想で変わる授業づくり」と題し、地域素材と ICT ツールを活用した教材開発や教育実践など、生命や環境、人権等、お話は多方面に渡り、楽しく、学びの多い講演をして頂きました。

研修員は、色々な事に興味を持ち続け、アンテナを張り、学び続ける藏満先生のお話を、それぞれの教育実践に繋げる思いを持ちながら真剣な表情で聞いていました。講演後の感想では、「『全てのものは、繋がっている』という言葉の意味を、自分自身の教育実践を省察し、社会と子どもをつなぐ教育ができるよう、広く高くアンテナを張りながら、興味・関心のある分野をどんどん広げていけるよう精進したいです。」「コミュニケーションのツールは違えども、その時代に合わせた仕掛けが子供たちの深い学びにつながるのだと思いました。」等とあり、満足度の高い講演会となりました。



特別講演会の様子

## 子どもの心を理解する保護者交流会

子どもの心を理解する保護者交流会は、適応指導教室に通級する児童生徒の保護者や不登校児童生徒の保護者がお互いに情報を交換し、交流を深める場を提供とともに、講話等を通して子どもの心を理解し、具体的な支援についてともに考える機会としています。

今年度第 1 回目は、6 月 26 日に琉球大学准教授の田中寛二氏、第 2 回目は、9 月 25 日に北谷町青少年支援センター公認心理師・臨床発達心理士の勝連雅美氏をそれぞれお招きし開催されました。休日開催にも関わらず、90 名余が集まり、関心の高さが感じられました。

今後の実施予定は以下のとおりとなっています。お知らせ・お申込み方法等については、各学校から保護者へ配布することになりますが、新型コロナ感染症拡大等により、日程等の変更がある場合があります。本総合教育センターの Web ページで御確認ください。多くの御参加をお待ちしております。

### 令和 4 年度 子どもの心を理解する保護者交流会（日程予定）

第 3 回	日 時	令和 4 年 12 月 11 日(日)13 時 30 分から 15 時 30 分
	場 所	県立総合教育センター 多目的研修棟 講堂
	講 師	北谷町教育委員会 SSW 公認心理師・臨床心理士 仲村 將義 氏

## 小・中学校の先生方の実践力・指導力向上をサポート！ ～「自主講座」小中理科・小学校家庭・中学校技術～

理科研修班では、小学校・中学校の先生を対象に実践的指導力向上を目的とした自主講座を開講しています。物理・化学・生物・地学の4分野の主事が在籍しているのは、教育センターとして全国的にも数ヵ所しかなく、理科の見方・考え方、実験・実習、観察指導の方法など各分野における専門的見地からの授業づくり支援を行っています。さらに2年前に休止した家庭科の自主講座も今年度から復活し、小学校理科の4つの領域（エネルギー・粒子・生命・地球）、中学校理科の物理・化学・生物・地学分野、小学校家庭科（被服・食物）、中学校技術の講座を行っています。

5月13日には小学校（粒子の領域）の「空気と水の性質」について講座を開催しました。参加者の感想には「注射器の中の風船の縮む様子をためしてみたかったので大変勉強になりました」「児童の興味の示し・気づきをどう起こすかが学べてよかったです」などが寄せられました。6月10日には小学校（生命の領域）の「植物のからだのつくりとはたらき」について開催し、色水を植物に吸い上げさせる実習や顕微鏡を使った気孔の観察を行いました。

また、6月10日には、小学校家庭科「手縫い・ミシン縫いの基礎」を開催し、手提げかばんの製作を行いました。参加者の感想には「少人数で質問しやすく、わからないことが沢山でしたが、1つ1つ解決できました。」「玉止めや玉結びなど、支援が必要な子への対応など新しい情報が得られた」などがありました。



空気を圧縮



気孔の観察



手提げかばんの製作

## 観察・実験・ものづくりを通して科学の楽しさを伝える体験学習教室 ～「夏休み おもしろ科学教室」～

小学生の親子を対象に、各市町村教育委員会と連携し、理科の実験や観察、ものづくりなどの体験学習を通して、科学への興味・関心を高める機会とすることを目的に「親子星空教室」、「夏休みおもしろ科学教室」、「移動おもしろ科学教室」の「体験学習教室」を開催しています。

7月26日に、本総合教育センターにおいて「夏休みおもしろ科学教室」を実施しました。今回は、「通り抜けできるブラックウォールボックス」と「ゴム動力で動くヘリコプター」の2つを製作しました。ものが見えるしくみとして、光の性質についての講義も行いました。ものづくりの後は、不思議な見え方をするボックスをのぞいたり、ヘリコプターを実際に飛ばしたりしました。参加した小学生からは、「(ブラックウォールボックスで)両方重ねたら、かべが見えるようになったのはすごかった」「揚力や垂直ていこう力など知らない言葉をしてくれしかった」などの感想が寄せられました。

9月25日には、久米島で「移動おもしろ科学教室」を行いました。



光の性質についての講義



ブラックウォールボックス作り



ゴム動力で動くヘリコプター作り

## 特別支援学校のセンター的機能の充実に向けて ～ 地域教育相談員研修会の取組～

本総合教育センター特別支援教育班では、「各地域での特別な支援が必要な幼児児童生徒の健やかな成長を図るため、養育、教育及び就学等に関する相談に応じ、適切な援助を行う。」という目的で、地域教育相談（平成30年度までは「障害児就学相談」）を行っています。県下、特別支援学校21校に各1名ずつ地域教育相談員を委嘱し、特別な支援の必要な乳幼児から高校生、保護者、教育関係者等を対象とした相談活動を展開しています。委嘱を受ける地域教育相談員（教諭）は、経験のある方から初めて担う方まで様々ですが、今年度は相談員の約半数が新規、半数が継続で構成され、4月27日に富里一公所長より委嘱状を受け、年6回の地域教育相談員研修会がスタートしました。

地域教育相談員研修会では、専門性を高めるための講義と「地域別連携協議会」「障害種別連携協議会」を交互に設定し、各ブロックごとに地域や障害種別に関する現状や課題について相談員が情報共有します。地域から寄せられる幅広い相談を担う相談員にとって、一人一人が抱える相談案件は、適切な助言になっているだろうか、判断材料に不足はないだろうかといった不安がつきものです。そうした不安を払拭すべく、経験豊富な相談員が経験の浅い相談員に助言するなど、ピアサポートの効果も期待しており「つながりが強くなり、支え合い、安心できる。」という声が上がるなど、協議会後の相談員の表情は毎回晴れやかに見えます。

一方、専門性の向上については、令和3年1月に中央教育審議会より取りまとめられた『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）においても、障害のある子供の学びの場の整備・連携強化の中で特別支援学校のセンター的機能の強化が求められているところです。インクルーシブ教育の理念を踏まえた特別支援教育をめぐる状況においては、まさに多様な変化に柔軟に対応する力が求められるとともに、幼児児童生徒の個々の教育的ニーズを適切に把握するための専門的な知識も更新していくかねばなりません。本研修会では、県内外の講師を招聘した研修講義計画（表1）を立て、特別支援学校のセンター的機能の充実に向けた地域教育相談員の資質向上に取り組んでいるところです。加えて、これまでの相談員の声をもとに作成した『コーディネーターハンドブック』も完成しました。重責を担う相談員一人一人が安心して効果的な支援ができるよう、その一助となることを期待しております。

表1 令和4年度 地域教育相談員研修会 研修講義計画

日時	講 師	講義内容
令和4年 4月27日(水)	県立学校教育課特別支援室 指導主事 伊波ますみ 特別支援教育班 班長 下里佳代子	沖縄県の就学事業について コーディネーターへ望むこと
令和4年 5月31日(火)	NPO法人沖縄青少年自立援助センターちゅらゆい 代表 金城隆一 氏	不登校支援・児童生徒理解について
令和4年 7月13日(水)	あなたクリニック 医師 滝川一廣 氏	愛着障害理解について
令和4年 9月30日(金)	特別支援教育班 研究主事 平良みどり	心理発達検査のアセスメント
令和4年 11月29日(火)	沖縄県発達障害者支援センターがじゅま～る 久貝晶子 氏	ペアレントプログラム(仮)
令和5年 2月22日(水)	香川大学教育学部 教授 坂井 聰 氏	今後の特別支援教育に向けて(仮)

地域教育相談員が校内外から受けた相談を総計したものが下表（表2）になります。ここでは一部の紹介になりますが、「就園・就学」「進路」に関する内容や「肢体不自由、病弱、情緒障害等」についての相談内容が増加傾向にあり、本県における肢体不自由、病弱、自閉症・情緒を含む特別支援学級の増加がその要因の一つであると考察しています。今後も地域教育相談員と連携を密に図りながら、本県の特別支援教育の推進と特別支援学校のセンター的機能の充実に向けて邁進して参ります。

表2 令和3年度 地域相談の区分別総数（校内・校外）

	区 分	件 数	回 数(累計)	備 考
R3	電話相談	6,152	4,121	電話による相談
	来校相談		3,011	相談者が相談員の勤務校に来校し行う相談
	訪問相談		1,044	依頼を受け、その場所に出向いて行う相談
	合 計		8,176	令和3年度2月末の相談総数
R2	前年度合計	5,882	8,910	令和2年度2月末の相談総数

## 産業教育実践講座（北中城中学校2学年）

令和4年6月10日（金）～27日（月）の期間、北中城中学校2学年5クラス159名が参加した産業教育実践講座が開催されました。産業教育実践講座とは、先端機器を使用し、農業、工業、商業の各分野に分かれ、ものづくりを通して実際の仕事を疑似体験するという体験プログラムです。今回は、総合的な学習の時間におけるキャリア教育の視点に立った講座として開催しました。

この講座は、「酸乳飲料の商品開発」と「植物工場野菜の商品化プロジェクト」の2つの体験テーマに分かれ、職業に見立てた班で活動を行い、それぞれのミッションを達成させるという内容です。講座の目的や内容について事前学習で学び、2つの体験テーマから体験したいものを選びます。各テーマは、3つの班で構成されそれぞれ2～4名ほどに編成されます。事前学習では、体験への動機付けを行い、主体的に体験に取り組む意欲につなげました。

各テーマについて活動内容を紹介します。

テーマ①「酸乳飲料の商品開発」は、はじめに酸乳飲料について商品名やイメージカラー、PRポイントなどを考える商品プランニングを行いました。添加する果汁やフレーバーをチーム全員で選び、そこから導かれるイメージワードやフレーズを使って商品名やPRポイントを考え出しました。その後、製造班、ラベル作成班、商品ポスター班に分かれ、商品プランニングをもとに活動しました。このときに重要なのが商品プランニングで決めたコンセプトです。各班、ばらばらで活動を行いますが、3つの班は、商品のコンセプトでつながっています。



商品プランニングの様子



ラベル作成の様子



リーフレタス収穫の様子



タグ加工の様子

テーマ②「植物工場野菜の商品化プロジェクト」は、メンバー全員で植物工場を見学し、植物工場で栽培されている野菜の特徴、安全性や制御について学習し共通の知識として理解しました。その後、3班に分かれて活動しました。「栽培班」は、リーフレタスの播種（種まき）から収穫までの栽培の一連の流れの体験、「FA体験・PRチラシ作成班」は、植物工場の光や水、肥料などの制御システムについて学習した後、この野菜がなぜ安全でおいしいのかPRするチラシを作成、「商品タグ作成班」は、植物工場野菜に付加価値をつけるための金属製の商品タグを作りました。

テーマの活動の最後には、それぞれの製作物を一つの商品として完成させ振り返り、活動の内容を共有しました。講座のまとめでは、「何ができたか」「何がわかったか」について、活動の振り返りを行いました。後日、学校での事後学習で個々の体験について共有化を図り、自らのキャリアについて考える機会につなげました。

今回の講座は、2学年対象であるため、学習のねらいを「自分の生き方について考える」とし、製品完成までに関わる職業について知り、生活の中にある仕事に気づき、未来の自分の生き方について考えることができるよう声掛けや質問を行いました。体験のまとめとして、製品が手元に届くまでに多くの職業や働く人が関わり、「誰かの仕事が自分の生活につながっていることや「未来の自分は世界をつくる誰かの一人である」ことを伝え、終了しました。



体験でつくりあげた製作物

産業教育班では義務教育、特に中学校を対象とした産業教育実践講座を通して、未来の自分を考えるきっかけの後押しをし、キャリア教育を支援していきます。

詳しくは、本総合教育センター産業教育班のWebページを参照ください。

## デジタル・シティズンシップ教育とは ～情報モラル教育のその先に向けて～

小・中学校のGIGAスクール開始から2年目となりました。それに伴い、本総合教育センターIT教育班では、1人1台学習用端末活用に関する研修を行っています。その中で「情報モラル教育とデジタル・シティズンシップ教育は何が違うのか？」との質問があります。今回は「デジタル・シティズンシップ教育」について簡潔に触れたいと思います。

### 1 情報モラル教育とデジタル・シティズンシップ教育、その方向性について

情報モラルは「情報社会で適正な活動を行うための基になる考え方と態度」を示します。欧米では情報モラル教育という用語ではなく、「デジタル・シティズンシップ教育」が使われており、「デジタル技術の利用を通じて、社会に積極的に関与するための、適切で責任ある行動規範を身に付ける教育」とされています。また、内閣府発表の「Society5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ」では、デジタル・シティズンシップ育成を喫緊の課題とし、教育委員会や学校への支援の実施と、次期学習指導要領改訂の検討において、各教科等で推進することを重視する方向性を示しています。

### 2 情報モラル教育とデジタル・シティズンシップ教育の違い

学校現場での情報モラル教育は、「日常モラル（心を磨く領域）」と「情報安全教育（知恵を磨く領域）」の2つの領域があり、正しい使い方や危険に巻き込まれないよう「規範遵守と制限」を前提とした生徒指導的側面が強かったといえます。しかし、今後ICTが生活により溶け込んでいくことが予測され、「ICT利活用を前提とした、自ら考え判断し行動できる力の育成」を目指したデジタル・シティズンシップ教育へ発展させる必要が出てきたといえます。「ICT社会の市民として正しいスキルを身に付け、善き社会の担い手となる」子供たちを育成するため、情報モラル教育から一步進んだ教育といえるでしょう。

## ICT活用7つの視点 ～学びのゴールを達成するための基本となる考え方～

世界では、教育分野にも最先端技術が導入され、「学びの変革」の動きが加速化しています。1人1台端末の導入にともない、学校の学習環境が大きく変わり、教師主導の授業から学習者主体の授業への転換が行われることになるため、学校現場の先生方からは、「授業でどのように活用できるのか」「生徒に指導することができるのか」「ICTの授業場面の活用例（あらかじめ想定された場面）はたくさんあるが、想定された場面以外での授業テンプレートをどのように変更すればいいのか」「授業のこの場面でなぜこのアプリが必要なのか、腑に落ちない」という『不安』や『困り感』の声が寄せられます。GIGAスクールで危惧するところは、授業でICTを活用するという手段が、目的になってしまわないかということです。この授業での学び、その時間のねらい・目標を達成することが大切なのであり、授業のどの場面で、どのアプリを活用すると目標達成に近づけるのか、どのように良くなるのかを理解する必要があります。IT教育班では、アプリ活用のメリット、その目的や必要性の理解、取り入れることによる効果について考える手立てとして、授業場面における『ICT活用7つの視点』を提案しています。

### 『ICT活用の7つの視点』

- 「活用の場面」：主に導入場面での生徒の興味関心や問い合わせをつかむ場面での活用。
- 「共有の場面」：展開場面などの情報の共有や共同作業等での活用。
- 「可視の場面」：全員の考えの共有、他者との考えの比較する場面での活用。
- 「対話の場面」：オンライン授業での活用、意見交換や議論を行う場面での活用。
- 「記録の場面」：活動の様子を記録、学習を振り返る場面での活用。
- 「創造の場面」：思考を分類、整理することで、学びを深める場面での活用。
- 「評価の場面」：自動採点機能などを活用し、評価やアドバイスをフィードバックする場面での活用。

### GIGA特設サイト 『ICT活用視点7』



## 令和4年度 前期・離島長期研修研究報告会

令和4年度前期長期研修研究報告会が9月7(水)・8日(木)の日程で、本総合教育センターで開催されました。前期長期研修員8名、離島長期研修員5名の計13名が各自のテーマに基づき、教育課題解決に向けて熱意のある報告を行いました。この報告会から、6か月の研究成果が実りある研究だったことが伝わってきました。教育現場でこれから還元していくことを期待し、下記に研修の感想を掲載します。



### 研修を通して 教科研修班 石垣市立登野城小学校 教諭 伊藤 真哲



4月より離島長期研修員として、半年間を過ごしてきました。教職に就いてから学校現場を離れることがないなど、何もかもが初めての経験となりました。研究を通して、学習指導要領をはじめ各参考文献を熟読することもでき、改めて知見を得ることができました。また、他校種の研修員との交流、研究内容や実践を紹介していただいたことで、自身の研究外でも学びの多い研修期間となりました。本研修を受けるにあたり、多くの方に支えて頂いたことに感謝するとともに、研修で得た成果を本校及び八重山地区に還元できるように努めていきたいと思います。

### 学び続ける教師として 特別支援教育班 県立桜野特別支援学校 教諭 池間 美弥子



切願していたセンターでの研修では、富里所長をはじめ多くの方々の講話を拝聴する機会に恵まれました。また、センター内の自然の豊かさに心癒され「龍騰虎躍の如く！」を話題に談笑する時間は、まさに「ぬちぐすい」となるひと時でもありました。一方、これまでの教職経験を振り返り、考え、多くの学びを得ることもでき、指導助言を頂いた特別支援教育班の班長、主事の方々も含め皆様に心より感謝申し上げます。

この半年間を糧に、常に変化し続ける教育現場で柔軟さ・行動力を持って今後も学び続けます。

### 素敵な時間を過ごしました 理科研修班 糸満市立潮平小学校 教諭 上窪 亮一



長期研修を振り返って、今までの実践を見つめなおす素敵な時間を過ごすことができたと感じています。たくさんの講話や研修、報告書等の作成で指導してくださった、所長をはじめ班長、主事の方々には感謝の気持ちでいっぱいです。また、高等学校、中学校、小学校、特別支援学校と、現場では交流できない、様々な校種の方々と交流を持て、指導や学校に関する事、他愛のない話の中でも自分自身の見方・考え方方が、随時アップデートされていく毎日がとても新鮮でした。これから現場に戻り、この経験を子供たちへ還元してきたいと思います。